地域の音楽家とニーズをつなぐ

~地方音楽部活動改革への取り組みを通して~

公財) 音楽文化創造認定 地域音楽コーディネーター 八幡平市立西根中学校 音楽科 柿崎 倫史

0.はじめに

拙稿が出る段階では筆者の考えはまだ具体化しておらず、突破口を見出そうと関係機関と相談や調整を図っている状態である。理想論に終わるかもしれないが、読者の皆さんが部活動改革へ少しでも関心を寄せていただければ幸いである。

まずは、地域と関わる「おんがくか」について述べる。特に、子どもたちに関わるところを取り上げたつもりだ。

次いで、今行われようとしている部活動改革について、筆者なりの課題点と移行のプランを提示する。 そこに地域と音楽家の「ニーズの一致」があるのではないかと考えている。

おわりに、その先にある地域音楽の姿について思うところを述べてみる。

1.音楽家と音楽科

私は地方の中学校音楽科の教員である。純粋な子どもたちと音楽のよさを考え、歌い、日々を過ごしている。経緯は後述するとして、我ながら素晴らしい仕事だなぁ、と思う。

一方で、筆者の弟はプロの音楽家である。弟が「プロになりたい」と言ったとき、「プロっていったいなんなんだ」と家族は揉めに揉めたのだが、よくよく聞いてみると「音楽だけをやっていきたい」ということだった。なるほど。その時から 15 年ほど経ったいま、彼はコンサート、ライブに忙しく(弟に成り代わってこの場を借りて文化庁の補助金に大いに感謝したい。ありがとうございます)、全国を飛び回っている。地元盛岡で開催するものもあり、その時には私もコンサートスタッフとして微力ながら手伝いをする。

お客さんの中には、夕方に仕事着のまま来場し、プレイガイドの封筒からおずおずとチケットを出し、 終演後に満面の笑みでホールから出てくる方もいる。私はそのような姿を見るのが好きだ。日々の授業 できらきらの目をして音楽に触れる子どもたちとその笑みは似ている。「この笑顔のもとはどこなのか …。自分の学校音楽教育はここに何か資しているのか…。」コンサートスタッフをしながら、そんなこと を考えるときがある。音楽文化の源泉はどこなのだ?

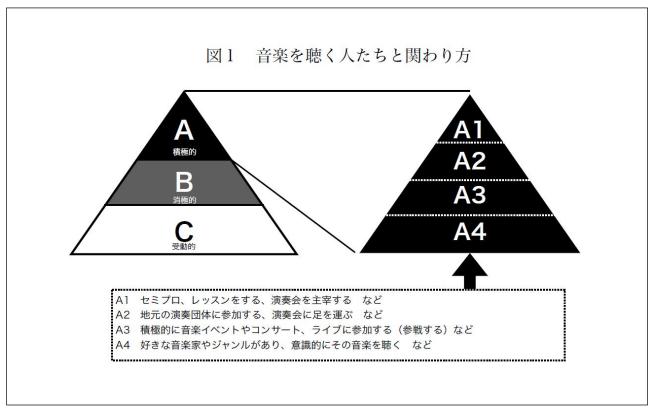
音楽家は「好きなことをやりたい」「音楽を広めたい」「音楽で生計を立てたい」などさまざまな信条・ポリシーで生き方を選んでいると思う。相当な覚悟が必要であることも理解している。しかし、我々が音楽家に求めるものはただ一つ「いい音楽を聴きたい」という思いではないか。この思い、ニーズを抜きにして音楽業界は成立しないと考えている。

そんな経緯もあり、私の仕事の目標は「『よき聴衆』を育てる」である。一般的な義務教育音楽科が目指すところとはちょっと違うかもしれないが…。

2.地域のための人材育成

義務教育が終わると、日常的に音楽にかける時間は圧倒的に少なくなる。ほとんどの場合、一般の人は音楽は趣味として関わることになるであろう。筆者なりに一般の人の音楽の関わり方について階層的に整理してみた※図1(ちなみにこの図について出典を持っているわけではないので、読者の方でこの手の情報をお持ちの方はぜひご教示いただきたい)。

我々は多くの「音」に囲まれている。耳を塞いで生活をしない限りは音や音楽に触れている(ある意味さらされている)のがアタリマエである。囲まれている音楽だけを受け入れている人たちを「C 受



動的」と表した。次いで、音楽に対して特にこだわりはないが、日々触れている人たちもいる。例えば、運転をする時に「とりあえず何か流しておくか…」といった意識の人々である。この層を「B 消極的に」とする。その上に好きな音楽家やアーティストがいたり、意識的に音楽を楽しむ人々を「A」。そして、「積極的に音楽を聴く」行為が熟し、ヨコにある「音楽を演奏する」という人たちの階層ができていく。地域の音楽文化においては、できることなら $A1\sim A3$ の数が多いほうが活発になるし、C の数が減ることが理想的である。

義務教育は全ての人間にアクセスできる機能をもつので、学校音楽教育が充実すればその理想形に近づけられるのではないか、私はそう考えた。そして、改めて部活動のちからの強さを感じたのであった。

3.部活動の二面性

改革が必要だと言われる部活動。筆者も例にもれず「ブカツで鍛えられた」人間なので、一概に部活動反対派ではない。私の部活動との関わりを時系列的に紹介したい。

3-1 筆者が生徒だったころ

私は新設中学校の第一回生として入学し、イチから部活動を立ち上げる経験をした。部員(当時は合唱も吹奏楽もやる「音楽部」だった)がだんだんに増え、楽器を借りて回り、小編成の合奏ができるようになった。学校初のコンクール出場、そして地区予選を金賞で突破、県大会では出演順1番にかかわらず金賞を受賞。みんなで大騒ぎしたことを覚えている。練習はまったく辛くなかった。仲間たちと笑いあい、音楽の楽しさを日々肌で感じていた。

そのようなことから、吹奏楽を動機に高校進学した。ジャズとの出会いもあり、音楽の仕組み(理論やリズム、コード、オーケストレーション等)に興味を持ち始めていた。「ピアニストと吹奏楽指導者、どっちにしようかな」などと、今となってはだいぶ背伸びをした夢を抱いていたのである。

高校も部活漬けの日々を過ごした。大学に行った時は反動(?)で合唱団体にのめり込み、ジャズの活動も始めた。音楽活動に明け暮れた学生時代だった。

3-2 教師として

音楽系民間企業を経た後に、教師となった。顧問として、吹奏楽の世界に戻ってきた私は、思う存分指導にうちこんだ。夏祭り、文化祭、熱く燃えたコンクール…。一生懸命な生徒と共に過ごす時間は幸せなものであった。吹奏楽に加え、合唱部も特設で同時に指導していた。どちらも自分のライフワークだと思って指導していたが、気がつくと、私のスケジュールは部活動で埋まってしまった。それでもお構いなしに過ごしていた。

しかし、2校目に転勤した学校は吹奏楽、合唱共に全国大会を目指すようなところだった。生徒と保護者の期待もあった。加えて教科についても高いレベルが求められ、そのうちにだんだんに身体の不調が続くようになってしまった。気づいたらずっと休んでいない…休日も仕事に行くようになり、周囲の期待に応えなければという思いのみで動いていた。

音楽を楽しむ喜びは子どもたちに味わわせたいが、加熱した部活動では生徒も教師も疲弊してしまうと身を持って理解した。この経緯を踏まえて私が門を叩いたのが「地域音楽コーディネーター」の講座である。私は部活動改革の先陣を切ろうと決意した。

4.地域のニーズを掘り起こす

さて、音楽文化部活動は地域の文化芸術振興の多くを担ってきたが、その機能を保ったまま持続可能 な形にしていく必要があると私は考えた。

コーディネーター講座をきっかけに、音楽文化創造の方々とお話をすることもできた。何回かのミーティングを通して、さまざまな案が浮かんでは消えていく。行政(文化庁)が推進する「部活動の地域移行」に際して、首都圏とは違う、地方都市ならではの課題も見えてきた。ここにいくつかの視点で整理したい。

- 1 指導者、音楽家との関係
- 2 練習会場・活動場所
- 3 コンクール等発表の機会の有無、軽重
- 4 楽器や楽譜の管理
- 5 運営母体

1 指導者、音楽家との関係

前述した「音楽家」は地方にもたくさんいる。大都市圏に比べると生計を立てるのは概ね難しいようだ。地方の音楽家には、安定した収入源としてレッスンや吹奏楽バンド指導をあてているケースも多い。彼らにとっては音楽指導・音楽教育は自分の専門的な能力を活かせる場でもあるし、後進を育てるという大義も果たせる。また、音楽を習いたい人、生徒にとってはプロの指導が受けられるので、双方に需要(ニーズ)があるといえる。

2 練習会場・活動場所

学校施設で練習していた部活動を外部に移行するには、練習会場の確保も必要である。まとまった人数が収容できる施設は限られているので、大型の公民館(拠点公民館)やホール、リハーサルスペース、イベントスペースなどが考えられるかもしれない。

3 コンクール等発表の機会の有無、軽重

前述の私の体験からも、コンクールは子どもの力と意欲を高める絶好の機会である。また、定期演奏会や発表会なども目標として掲げることができる。しかし、コンクールへの取り組みが加熱したり、発表会を行う上での経済的負担や練習時間の確保という問題も出てくる。

4 楽器や楽譜の管理

吹奏楽部が扱う楽器には大型のものも多い。ティンパニや大型マリンバ、チューバなどを個人でもつような家庭はほとんどない(特殊な例を除いて。筆者は見たことがあるが…)。置き場所も困るし、多くの楽譜も必要になる。学校が担ってきた事の大きい要素である。

5 運営母体

ここまで述べてきたいくつかの要素を束ねる存在が必要である。共働きが多いこの時代、保護者会だけではまかなえない部分もある。専門的見地も必要になる場合もある。

私が発案し、今実行に移している(移そうとしている)のは「NPO 団体が部活動に代わる音楽活動を

移行プランA 移行プランB 移行プランC 費用 中 低 高 愛好家・教員OB・ 指導者 プロ・セミプロ セミプロ・愛好家 地域住民 拠点公民館・ホール・ホ 拠点公民館・地域公民 地域公民館・地区公 練習会場 -ル附属リハーサル室等 民館・学校施設等 館・学校施設開放等 発表の機会 地域音楽コーディネートNPO 保護者会·NPO等 運営母体

▲表1 「地域音楽コーディネート NPO が示す『部活動の地域移行案』」の例

コ帝音供ラプのいのと管へがする動」あでンを有情ないのとるは欠県例・ホーンのとるは欠県例・ホーーのののと、理がしてはないのと、ではないののとではないのののと、ではないのののとではないのののとではないののと

音楽愛好家を指導者に据えている。この事例から学ぶことは多くあり、私の活動(しようとしている)のヒントとなった。吹奏楽に限って、今温めている「地域音楽コーディネート NPO が示す『部活動の地域移行案』」を挙げたい。(表1)

A 強豪校型パターン

吹奏楽部の中でも「強豪校」と言われる学校は、地元や首都圏からの音楽家を呼んで指導をしてもらう。指導料はその分値が張ることとなるが、「一生懸命やりたい」「コンクールで上位を目指したい」という子ども・家庭が集うため、習い事同様に費用はかけるのではないかと予想する。地元の音楽家は、このゾーンからレッスン等の収益をあげられるので、地方の音楽文化の底上げを図ることができる。

B 発表会・コンクール出演型パターン

(うまく説明するのが難しいのだが)「普通の」吹奏楽部がこれにあたる。現状では毎日の部活動のガイドラインに沿ったかたち(平日 2 時間、休日 3 時間、週休 2 日)のペースで活動をし、集まったメンバーで合奏を楽しむ。コンクール出場、無理のない発表会を行い、本番の機会を持つ。ここには地域のセミプロや音楽愛好家を指導者に据える。

C 愛好会的吹奏楽部のパターン

楽器を触ってみたい、体験してみたいという思いを形にするのがこのパターンである。周囲の吹奏楽部では部員一桁台の部もあり、そんな部では練習もゆるやかだと聞いている。コンクール等に出ることになれば、否応なしに周囲の部と比べることになるのだが、そもそも出ることを主眼としなければよい。放課後デイサービスや学童保育の延長のような形で子どもたちを見守る人材が確保し、収容人数が10~30人ほどの寄合所的な公民館が活用できると考えている。

2023 年は部活動移行の夜明けである。この時期のスムーズな体制づくりが、前述の図 1 で言うところの「音楽への関わり A」の人材を育成し、豊かさを伴った「音楽の裾野」を広げることとなるであろう。

5.どんな底が見えてくるか

最後に、直近の出来事を紹介したい。

コロナ禍も相まって、部活動の時間はかなり適正なものに変化していった。一週間のスケジュールでは土曜日のみ午前の練習。自ずと活動内容も無駄がないスリムな内容へなっていった。コンクールは工夫しながら練習し、生徒たちは精一杯のちからでステージに上がった。どの学校もそのように見えた。 筆者の勤務校では子どもたちが目標としていた「県大会金賞」を受賞し、大歓声の中で今年の夏を終えることができたのである。

そんなコンクール練習の真っ只中の時期に地域のお祭りがあった。

生徒「先生、小学生のころから、私は山車で笛を吹いているんです。この日は部活を休んでもいいですか? |

私「うーん、大事な合奏が続くからな…」

生徒「先生、私もです」「私は一日太鼓を叩くんです。その日は学校も休みます。」

…私も心が動いた。

「吹奏楽だけが音楽ではないよなぁ」と。そんな思いで今まで音楽と関わって自分は歩んできたのではなかったか。

私「ヨシ!みんな地区大会も頑張ったからな!その日は部活はオフにしよう。みんな祭りにいっておいで!

「え!やったー!!わー!!!!

そこであがった歓声は私の予想をはるかに上回るものであった。鳥肌がたった。「これは、部活動移行やコンクールの問題を飛び越えた、ものすごいパワーではないのか」と。さらに近くの生徒に言われた。「センセー、さすが!分かってますね~~~」

子どもたちにとってはブカツよりも地元のお祭りなのである。そして、その祭りには地元の伝統音楽 文化が根を張っている。

学校で行われていた、吹奏楽・合唱などの受け皿が地域に移行されるのは大賛成である。しかし、人口減少による子どもの数は右肩下がりで、地域の芸術文化にかけるリソースは減っている。伝統音楽が腰を据えている地域に、学校教育でやってきた西洋音楽が張り出していっていいのだろうか?

そんなモヤモヤを抱えていたので、個人的なツテをたどり、コミュニティ・ミュージックの大家である塩原麻里先生とお話する機会を作ってもらった。先生にお聞きしたところ、国によっては地域音楽(コミュニティ・ミュージック)の考え方はかなり浸透しており、地域音楽部活動(コミュニティ・ミュージック・アクティビティ)は子どもたちの大切な活動として機能しているようである。これは日本でも先行事例として参考にしていかなければなぁ、などと考えさせられた。

お話の最後に、先ほどの伝統音楽と部活動移行のミスマッチについて相談してみた。塩原先生は「今も昔も、日本は西洋音楽も伝統音楽も音楽を通して上位の目的である『子どもたちを育てる』ことをしてきた。たしかに、地域の音楽文化がこれからはリソース減で干上がっていくかもしれない。としながらも、その干上がった後に、どんな島が残るのか、日本の底力を見てみたい」と仰った。

総務省が示しているロードマップでは 2030 年までに社会に多くの変革が必要とされている。コロナ禍も追い打ちをかけ、音楽を取り巻く世界は質的保証をするのにかなりのエネルギーとイノベーションを必要とされる。今、太鼓の振動や管楽器の響きを身体で体感できる時代は幸せなのかもしれない。

変革はチャンスの時でもある。「音楽家」と「音楽科」、ふたつの「おんがくか」が学校を越えて「子どもたちを育てる」ことができるのか。地方の小さな取り組みのさざなみから、大きなうねりになることを願っている。